Happy ケア・メンテ
TOKYO・KYOTO
Happy・Care & MaIntenance

本　　社　〒611-0041
京都府宇治市槇島町目川 70 番地の 1
E-mail:happy@kyoto-happy.co.jp

東京オフィス　〒104-0061
東京都中央区銀座 2-6-7 明治屋銀座ビル
アルフレッドダンヒル銀座本店内
E-mail:dunhill@kyoto-happy.co.jp

U　R　L　www.kyoto-happy.co.jp
www.dunhill-happy.com

発行　株式会社ハッピー
監修　関本 徹生
　　大森 あき子
題字　西枝 千春

FEBUARY 2008 VOL.10
平成 20 年 2 月発行　幸 sachi　第 10 号

着だおれ京都から発信

幸 sachi

［特集］京都に息づく伝統の技

「温故知新　―故(ふる)きを温(たず)ねて　新しきを知る―」

京瓦師・浅田晶久

今号の表紙写真は
鬼瓦の写真実測図。
詳細は P11 参照。

特集

京都に息づく伝統の技

もくじ 1

こだわりと見極め 3

職人で在り続ける 5

なんなりと
瓦職人にとって一人前とは

素材にこだわる 8

木の型のこと
土のこと

一(ひと)へらに懸ける情熱 9

瓦作りに適した季節
京瓦の真髄

鬼瓦ノ今 11

鬼瓦の図面
鬼瓦の大きさ

編集後記 14

こだわりと見極め

無駄をなくすことを一生考え続ける。
死ぬ前日まで作っているかもしれない。
三代続く伝統の技と、今を見つめ瓦と戦う。

一つひとつの言葉を飾らない。しかし自己を
見つめるひたむきな芯の力強さを、気さくな
人柄の中に垣間見ることができる。

京瓦師・浅田晶久

職人で在り続ける

なんなりと

浅田家の家訓に「何なりと作ります」というのがある。京都の瓦屋・製造元は、ひとつの建物を全て１軒でまかなう。淡路や三河では、鬼瓦だけを専門的に作る所が多いが、京都ではあらゆる種類の瓦を１軒で製造し、受けた注文は、全て引き受ける慣習があったため、そんな家訓が生まれた。

瓦職人にとって一人前とは

「職人に必要な要素は根気しかないんです。向上心と根気があれば何でもできる。でも、これが完成ということは永遠にないんですよ」瓦は自身の重みにより乾燥時に少し歪みが出る。その歪みを前もって予測し、その分を反らすことにより乾燥後、理想の形となる。土の呼吸を知る熟練された技の一つだ。

二つの視点で瓦に打ち込む

浅田製瓦工場は晶久さんで３代目。小学校の頃から、瓦屋を継ぐか、建築士になるか、どちらかだと思っていたという。建築科を出ていれば両方に通じると考え、建築科を卒業した。一級建築士はたくさんいるが、瓦屋は年寄りばかりで仕事をする人がいなくなる危機感もあり、大学卒業後、建築士をあきらめて瓦職人になった。

瓦に学ぶ

好きな言葉は「温故知新」。古い瓦を勉強することで新しい技法や手法が浮かぶ。瓦は歴史が古く、現在、自分が考えていることが新しいと思っていても、何百年も昔に挑戦している人がいることもある。モノを学ぶということは大変だが、反面、教わるところも多いと浅田さんは言われる。

瓦の木型。乾燥のために吊るされる。驚くほど多くの種類がある。

古い瓦を捨てず、粉砕して再利用する方法を研究している。

粘土をそぐための鎌。

ガス窯。約 800 枚の瓦が入る。

磨きを終えた瓦を乾燥させる。

なで板。水をつけて粘土の表面を滑らかにするために使用する。

瓦作りに使われる様々な道具。使いやすいように種類ごとに分けて置かれている。

ひがき。瓦と葺土を密着させるために瓦の裏側に傷をつける道具。

瓦を磨くためのへら。金へらで仕上げると艶が出るという。

素材にこだわる

木の型のこと

かつて、京都には瓦作りのための木型屋があり、瓦職人にとって最も身近で重要なものともいえる木型の安定供給が行なわれていた。また、この木型屋が存在することで、どの職人が手がけた京瓦も統一された規格で作られることで、京都の大規模な寺社や邸宅の造営に対応できる京瓦の生産体制が築かれていた。

『私が若い頃は、まだ 2 軒ほど木型屋さんが残っていましたね。でも、使い手の減少に伴って、現在は 1 軒も残っていません。木型を使って瓦を作るなんて、京都ではウチだけになってしまいましたからね。今は木型も他の道具も全部自分で作らなあかんようになりました』

土のこと

瓦作りにおける唯一の材料とも言える土は、現在、三河産の土にベトナム産の土を少量混ぜ合わせたものを使用している。

『かつて京瓦に使われていた伏見深草の土は、きめが細かく、磨けば磨くほど艶が出る良い土でしたが、宅地開発などの影響で今では手に入らなくなってしまいました。代わりに使っている三河産の土は粒子が粗く、砂を多く含んでいるため、磨いてもなかなかざらつきが消えないんです。いろいろ試してみた挙げ句、現在は粒子の細かいベトナム産の土を三河産の土に少量混ぜることで瓦の質を保つようにしています』

一へら（ひと）に懸ける情熱

瓦作りに適した季節

瓦作りに適した気温は 20 度前後。人間にとっても一番過しやすい季節が瓦にとっても良い季節だ。しかし暑い時も寒い時も職人は瓦作りに適した作業を行わなければならない。夏場はせっかく磨いた表面に汗が落ちて濡れ、撫でると艶にバラつきがでてしまうため細心の注意を払う。また、すぐ乾燥させると表面にヒビが入るため布などを被せ、乾燥を遅らす。冬場は乾燥を促すために、ストーブの後ろから扇風機で風を当てるなどの工夫をしている。

京瓦の真髄

京瓦の品質はナミ・ミガキ・ホンウスと大きく分けて 3 種類ある。仕上げの程度により分類していくが、いずれも磨きを中心に作っていく。機械での量産の場合も最終的には手で磨く工程が入る。一枚の瓦を作るのにすべてのものを京都で賄うことが理想だが、粘土は京都でとることができず、燃料も輸入だ。京瓦が何をもって京瓦というのかは、伝承され、今に残る技術、磨きにあり、それを人間、浅田晶久氏が受け継いでいる。

鬼瓦ノ今

鬼瓦の図面

お寺から鬼瓦の注文を直接受けることは、ない。基本は、瓦屋販売商からの注文だ。鬼瓦のデザイン（制作図面）について、昔は墨で描き、平面図だけで制作をしていた。平面図を描くということは、ある程度立体が頭の中に浮かんでいるというのが前提である。しかし 浅田氏は、お客さんにわかってもらえるように、建築科で勉強していた経験を活かし、 立面図、平面図にして見せているという。

鬼瓦の大きさ

鬼瓦の大きさの限界は、およそ三尺（約90センチメートル）角くらい。西本願寺の一番大きいものは三尺三寸角(約１メートル)くらいのものが組み合わされずに一つの形で作られている。それが限界である。それ以上のものを作れないことはないが、施工時に重量がかさみ危険なため、それ位にしてほしいとの要望があった。過去の記録では、一番大きな鬼瓦は、高さ１メートル 50 センチ。それは屋根に乗っているのではなく、御前丸太町の京都アスニーに展示されている。

表紙の説明

表紙で使用した図面は、平安京豊楽殿(ぶらくでん)跡より出土した鬼瓦を(財)京都市埋蔵文化財研究所が様々なデータを基に 3D 化したものである。794 年、都が平安京に遷都され、豊楽殿は799年に完成した。天皇が国際的な饗宴を行うことを目的に造営された建物である。

協力：財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

鬼瓦の移り変わり

昔の鬼瓦の主流はレリーフ状の平面だった。技を競い合い、技術を高めていくことによって鬼瓦は徐々に立体化してきた流れがある。また、構造的には鬼の全身像を表現したものもあった。しかし数が少なく、平城京などから発掘されたレリーフ状の鬼瓦の中に全身像が少し見つかったぐらいだ。大半は顔だけを表したものだという。

暗闇に文字が浮かび上がる、瓦のランプシェード。

図柄に十二支が模した瓦。家紋などの紋様のものもある。

平安京の豊楽殿（ぶらくでん）にのっていた鴟尾（しび）の模型。

鯱（しゃち）の頭部。17 世紀頃から城郭に乗せるようになった。

鐘馗（しょうき）。魔除けとして屋根の上に置く。京都の町家でよく見ることができる。

鬼瓦。魔除けの力を持つと言われる。写真は浅田製瓦工場の近辺で見つけた鬼瓦。

編集後記

今号「幸」vol.10 は前回に引き続き、私たち京都造形芸術大学の学生チームが取材・編集しました。

伝統工芸に対して、理解のなかった不安だらけの前号と比べ、今回は取材から編集、入稿までをスムーズに進めることができ、私たちはようやくスタートラインに立つことができたと感じています。

京都で、京瓦を手がける工房は、５年ほど前までは４、５軒ありました。しかし、ここ２、３年ほどで次々と廃業され、今では今回取材をさせて頂いた浅田製瓦工場ともう１軒しか残っていないようです。このような状況でも浅田さんの向上心は途絶えることがありません。今も尚、伝統の技の研究、瓦の再利用や新しい土の開発など、次世代に受け継ぐべく研究されている姿や並々ならぬ想いで瓦の製作に打ち込んでおられる姿を一人でも多くの読者に伝えられればと思います。

京瓦の繊細な技、浅田さんの熱意が形となった作品の魅力を感じて頂ければ幸いです。

これからも私たち学生だからこそ作れる「幸」を目指していきます。（中川・楠本）

幸 sachi

平成 20 年 2 月発行　幸 sachi　第 10 号
FEBUARY 2008 VOL.10

sachi プロジェクトチーム
角井亜由美　梶川　遥
楠本高大　小嶋庄太郎
下里卓也　宗　幸
中川博仁　埴岡紘介
原元絵美　宮崎幹子
吉田裕香　吉田侑加

協力
吉川　譲　（写真）
サクラエディトリアルワークス

京都造形芸術大学
Kyoto University of Art and Design
〒606-8271　京都市左京区北白川瓜生山 2-116
http://www.kyoto-art.ac.jp/